今年の２月かねてからの念願であったインドへ行ってまいりました。

僧侶となりまして、一度は行ってみたいと思っていたところでしたので、増上寺布教師会でインド旅行のお話があった時にすぐに申し込みました。 お釈迦様のお生まれになった処、仏教の生まれたところ。いったいどんなところなんだろう。空は、空気は、気温は、すべてが楽しみでした。

　インドは日本の十倍の広さがあり,人口も日本の十倍あるそうです。といっても、十年に一度の人口調査があるそうですが、出生届のようなものは無く、子供の死亡率が非常に高く、死亡者数に入らずに死んでいく子供達が沢山いるようです。

ニューデリーはインドの首都ですが、道路から溢れるくらいに車はありますが、水やガス・下水道・電話はほとんど普及していません。多くの人が井戸の水を使い体を洗い、道端で生活しています。少し都市から離れると、電気さえも通ってません。街灯など一本もなく、夜は真っ暗です。

日本は法然上人の時代に比べて、現在までに飛躍的な近代化を成し遂げたましたが、インドはお釈迦様のおられた二千五百年前から、あまり変わっていないのではないかと思うくらいです。インドではお釈迦様のお生まれになる前からカースト制といわれる身分制度がありました。お釈迦様がお母様の脇の下からお生まれになったと言われているのは、お釈迦様のカーストつまり身分を表しているのです。

お釈迦様は釈迦族の王子。王族・武士は上から２番目の身分シャクトリアといいます。

最も身分が高いのがバラモンと呼ばれる祭祀を司る人々で彼らは頭から、誕生するそうです。２番目が王族でわき腹、３番目がビアイシャと呼ばれる平民で太ももから生まれ、最下層がシュードラと呼ばれる奴隷で踵から生まれるといわれています。カーストの制度にさえも加わっていないアチュートと呼ばれる人々は見ただけでも、触れただけでも穢れるとされています。それは、お釈迦様がわき腹から生まれたと言われている２５００年前から現代まで何も変わっていないのです。身分の違う同士で、結婚することはもちろん同席することも出来ませんし、職業の自由もありません。岩を掘る人、その岩を籠に乗せる人、籠を車に運ぶ人、車を運転する人。すべて職業にカーストがかかわっていて、他の仕事をすることが禁じられています。ですから、どんなに頑張ったって生活は楽にならない。カーストの身分が上がることはないので、勤労意欲が無いのです。ほとんどの人々が木陰に座ってぼんやり風景を眺めていたり昼寝をしたりしています。

お釈迦様が目にした風景もこのような、いえ、現代以上に差別があり、殺伐とした風景だったのだろうと思いました。お釈迦様はルンビ二ーという、ここは現在ネパールという国なのですが、そこでお生まれになり、二十八歳まで王子として過ごされました。お釈迦様も結婚して男の子が生まれて、釈迦族の後継者ができたこともあって、自分が出家が出来たとも言われています。

それから７年間苦行なさいますが、体を痛めつけての修行では悟ることが出来ないと、山を下り菩提樹の下で瞑想に入られます。そして、ついに悟りを開き、その後はあえて伝導という茨の道を選ばれたのです。お釈迦様のみ教えはお弟子達に語り継がれ、それがお経として遺されています。後世の法然上人は、その八万四千もあると言われるお経を悉く読破なされたと云われています。法然上人は「念仏は弥陀にも利生の本願、釈迦にも出生の本懐なり」とおっしゃっています。お釈迦様がこの世に人としてお生まれくださったのは「お念仏をお唱えすれば、阿弥陀様が必ず救いとって下さる」という阿弥陀様の本願を私達に知らしめてくださる為と法然上人はおっしゃっているのです。

差別が蔓延していた時代にお釈迦様はお生まれになり、すべての人間が等しく救われるお念仏があることを私達に教えて下さったのです。念仏は、どんなに身分の低い人でも、どんな罪深い人でも必ず阿弥陀様に救って頂ける約束で、そこに差別はありません。お釈迦様は、過酷な時代に生き、貧困や差別の只中にあって、決して人を身分によって差別することはありませんでした。バラモンもシュードラも同じお弟子になって修行なさっています。

法然上人がおっしゃっているように、お釈迦様の出世の本懐は正しく誰もが間違いなく救われるお念仏であったはずです。しかし、いまだ差別の続くインドの状況をみて、仏教の発祥の地にも関わらずこの現実は何なのだろうと、私は残念に思いました。

お釈迦さまの時代から差別貧困の苦しみがあり、法然上人の時代には戦乱・飢饉の苦しみがあり、現代は病気・老い・お金という苦しみがあります。時代が変わり苦しみが変っても、やはり苦しみから逃れることが出来ない私達です。この豊かな日本に住み便利な時代になっても生きている限り苦しみや悩みは付きまといます。

私の母方の伯母は八十九歳で亡くなりました。連れ合いを先立たれ、次々と姉妹を亡くし最後に一人残され「お父さんのとこに往くんだから」が口癖の伯母でした。骨折を何度も繰り返し、腰に大きなコルセットを巻いていましたが、伯母は廊下の手すりにつかまって毎日歩いていました。心配して寝ているように頼む娘にも大丈夫の一点張りで暇があれば廊下を歩くのです。

そんな伯母が亡くなってしばらくして「病床日記」と題したノートが見つかりました。そのノートには、同居していた娘への感謝の言葉が繰り返し書かれていました。一言の愚痴もこぼさなかった伯母ですが、そのノートには歳を取ることの悲しさ、体が思うように動かなくなった辛さが書かれていました。よく見ると、毎日の日付の下に細かい数字が書き入れてありました。３５７６、８６２８、１００３８など、その数字の意味は不明でした。やっと判明したのは伯母の文机の引き出しに万歩計を見つけた時でした。その数字は伯母が万歩計を付けて毎日廊下を歩いた歩数だったのです。なんと、痛い腰で、足を引きずるようにして毎日一万に近い歩数を歩いていたのです。

ノートには「歩くのは辛いです。体を起すのも辛いです。生きているのが辛いです。けれお父さんのいるお浄土にいけるのだからそれだけが救いなのです。」そして、娘には「私は早くお浄土へ往きたいと願っています。そこにはあなたのおばあちゃんもおじいちゃんもお父さんもいるから楽しみです。私が死んだら何も心配することはないから決して悲しまないで下さいね。私の看病で大変だったね。お浄土へ行ったら私が見守っているから私の二倍も三倍も幸せになってね。面倒かけてごめんね。ありがとう」とつづってありました。間近に迫っている死を感じながら、不安や恐怖をではなく安堵や希望さえ感じさせるこの言葉に従姉は「なんだか死ぬのが恐くなくなったわ」と泣き笑いしながら云いました。

伯母は阿弥陀様を信じて、西方の極楽浄土へ往きたい一心でお念仏を称えていたのです。そんなことはおくびにも出さず、痛む体を引きずるようにして歩くのはさぞ苦しかったでしょう。兄弟姉妹をことごとく亡くし、孤独とひとり向き合って生きてきたのはどんなにか淋しかったでしょう。そんな苦痛や孤独と闘いながらでも廊下をお念仏を称えながら歩いていたのは、そうすれば必ずお浄土へ往けるという信念があったからだと思います。お浄土を欣い求めながらも、生きているうちは一所懸命でなくてはならないのです。

この伯母の生き様が、お釈迦様２５００年の前の昔、差別や貧困に苦しむ人々に伝えられた事だと思えます。生きるということは、形こそ違い苦しいことです。苦しいけれど、阿弥陀様を信じお念仏を称えれば必ず阿弥陀様のところへ往くことができる。そこには差別も無く。病気も無く。貧しさや差別も無い。すべての者が平等に修行をし、やがて自らが仏となって苦しむ人々を自分の力で救うことができる。その思いが辛いこの世でも自分を大事に生き抜かせてくれるのです。

現在のインドでは仏教の信者は全体の０・０４パーセントだそうです。後から入ってきたイスラム教が、圧倒的な力を行使して仏教遺跡を破壊し制圧したことが原因しています。お釈迦様があの差別と貧困からすべての人々が救われる阿弥陀様の身教えを説いて下さったのに、当地のインドで仏教がそこまで廃れてしまったのは大変無念なことです。もし、仏教がインドに広く信仰されていたらインドの現在は大きく違っていたと思います。しかし、そこから、遥か東方の日本でお釈迦様の出生の本懐であるお念仏は今も称えられています。

お釈迦様の御教えは、平和で平等の救いです。私達は仏教徒であることに誇りをもって生活していきたいと思います。